

「やる気応援奨学金」レポート

「海外のカフェで働きたい」 夢を現実にしたロンドン留学

法学部政治学科四年 古池 茜 (神奈川県立生田高校)



はじめに

大学三年の夏休み、「やる気応援奨学金」をいただいてロンドンへ一カ月間の留学に行ってきました。英語に自信もなく、初めての留学で分からないことだらけ。私にとっては人生最大の挑戦とも言える経験となりました。

無理だと思っていた奨学金

私は入学以前から、先輩や姉を通して「やる気応援奨学金」の存在を知っていました。大学に入学したらぜひチャレンジしてみたいと思っていたので一年生の時点で説明会に参加しました。しかし実

際に話を聞いてみると、自分でテーマを決め、それを実行するためのすべてのアポイントメントを自身力で取らなければならぬと分かり愕然とした記憶があります。更には、エントリーシートも面接もすべて英語と聞いて自分には到底無理だと挑戦する前からあきらめてしまいました。

挑戦しようと思ったきっかけ

海外ボランティアサークルに所属し、長期休みになる度に仲間たちと海外をバックパックしました。旅中にはもちろん英語を使いますが、伝えようという積極性と、簡単な英単語と、ジェスチャーさえあれ

ば大体のことは通じてしまいます。

英語には全く自信がなかったけれど積極性だけはあったので、「何だ、英語がしゃべれなくてもどうにかなるじゃん!」と思っていました。しかし、FLPプログラムでNY研修に行った時にすべてが変わりました。英語での説明やディスカッションなどに全く付いていけず笑うことしか出来なかったのです。ただの旅行ではどうにかやっていけるもの、実際は英語がしゃべれないと何も始まらないし、このままじゃまずいと危機感を持ちました。今までは海外に行って旅行して何となく英語をしゃべって、それで満足して成長した気になっ

ていましたが、それは言ってしまうと誰でも出来ることだと気付きました。今までの経験をステップとして、何か新しいことにチャレンジしたいと思っていた時に思い出したのが「やる気応援奨学金」でした。

いざ留学計画を練る

一、二年生の応募が多い「やる気応援奨学金」に三年生の私が合格するためには、「今までの勉強や経験から生まれた三年生らしいテーマである必要がある」とアドバイスを受けました。自分が今までの大学生活で頑張ってきたことは何かと考えた時に、コーヒリアドバイザーという資格まで取ったカフェでのアルバイト、FLPのジャーナリズムゼミに所属し力を入れていたメディアの授業、そして実際にその業界に携わってみたいと思い始めたTBSでの報道番組

のアシスタントの仕事でした。こ
の中でも特に「海外のカフェで働
いてみたい」という思いが強く、
これを中心に計画作りをすること
にしました。また、TBSでのア
ルバイトや日頃の勉強を発展させ
て、日本のメディアと海外のメデ
ィアを比べることもテーマにしま

した。TBSのスタッフの方にお
願いをして、TBSロンドン支局
とBBC（イギリスの公共放送
局）へのインタビュアーのアポイン
トメントも取らせてもらいました。
留学をしてみたい、海外のカフ
ェで働いてみたいという漠然とし
た思いを実現可能な計画に持って

いくにはどうしたら良
いかをひたすら考え、
調べ、アプローチする
という試行錯誤の時間
はつらくなったり投げ
出したくなったりする
こともありましたが、
今振り返ってみると、
自分と向き合って熟考
したこの時間こそが今
回の留学の充実感を決
めたのだと思います。

ホストファミリーと
初対面！

私は大学も実家から
通っているのですが、いま
までに親元を離れて頼ら
ずに生活をするという
経験がありませんでし

た。そのためホストファミリーと
の生活はどのようなものになるの
だろうか、自分はどこまでやれる
のかと楽しみと不安が交錯してい
ました。ホストファミリーはお父
さん、お母さん、同世代の子供、三
人。着いた瞬間から、温かく受け
入れてくれて気持ちホッとした
のを覚えています。初日には、お
母さんと娘さんが近所や公園を案
内してくれて、ここでの生活を楽
しもうとポジティブになることが
出来ました。料理が趣味のホスト
マザーは、イギリスの伝統料理を
食卓に出してくれて、必ず家族全
員そろって夕食を食べました。私
も大量の日本食を持っていったの
だったので、カレー、ラーメン、みそ
汁、そば、うどんを作って一緒に
箸で食べたのも良い思い出です。

初めの頃はホストファミリーに
話し掛けられたら答えるという受
け身だったので、だんだんと
自分からも話し掛けられるよう
になりました。夕食の後は紅茶をみ
んなで飲んで家族団らんの場にも
入れてくれたのでかなり会話力が
鍛えられたと思います。

放課後、学校の友人とピクニック



最後のお別れの時には、手紙を
渡し、またホストファミリーから
はプレゼントをいただいたので悲
しくて寂しくて号泣してしまいま
した。ホストファミリーとの生活
は一生モノの経験になったと思っ
ます。伝えられなくて悔しかった
気持ち、もつと色々な話をしたか

お別れの日、ホストファザー・マザーと家の前で



ったという気持ちでバネに、更にしゃべれるようになるよう努力すると決心しました。

日本人が多くて少しがっかり：

色々な国の友達を作りたい！と、楽しみにしていた語学学校。しかし、夏休みという時期のためか日本人が多く、少しがっかりしてしまいました。

しかし、全力でつかみ取った留学、絶対に後悔だけはしたくない！と、自分の中でルールを決めました。自分から日本人に話しかける時には英語を使う、日本人同士で遊ぶ時には必ず一人は外国の友達を入れる、休み時間やランチの時に日本人だけの集団には入らない、クラスルームで日本人の隣には座らない、です。なるべく日本語を使わない環境に身を置く努力は怠りませんでした。もちろんあからさまに日本人を避けるようなこともしませんでした。なぜなら、同じ日本という国で育ちながらも、自分とは違うバックグラウンドや理由を持って、同じ場所を選び今ここに一緒にいる、とい

う人の話を聞くことは面白かったからです。他大の学生、ワーキングホリデーで夢を追っている人、家族の理解を得て長期留学している主婦の方との出会いは、外国の友達を作ることと同様に刺激的でした。日本人の友達との出会いも、私に新しい価値観を与えてくれたと思っています。

また、授業は今までに体験したことのないようなスタイルで行われていました。自分から積極的に参加しなければ授業に参加出来ないのです。間違いを恐れて発言しないなんて考えは通用しない環境だったので私も積極的に発言しました。

あこがれの海外のカフェで働く

「海外のカフェで働きたい」というテーマを実現させることが、今回の留学で一番大変なことでした。(どこの誰かも分からない人間から、いきなり、働かせてくれたという問い合わせが来るのだから無理もありませんが……)

通えそうなロンドン市内のカフェを手当たり次第に英語で検索、

カフェのバイト仲間。左から、私、フランス人、エクアドル人



五〇件以上のカフェにメールを出し続けました。そして、唯一返信が来たカフェと必死で交渉をし、ボランティアとして働かせてもらうことになりました。ボランティアといっても仕事内容としてはオ

ーダーを取る、コーヒーやサンドイッチを作る、皿洗いや清掃など普通のアルバイトと同じです。

日本のカフェで三年近くアルバイトをしていたので、基本的な流れやレシピは理解していましたが、

やはり英語でとなると、付いていけないことが多くありました。

カフェではフランス人やウクライナ人、フィリピン人など、色々な国籍の従業員が働いていました。語学学校には日本人もいて、日本語が通じる環境であったため、ここでの経験こそが本当に異文化だったし、一番英語力を伸ばしたように思います。お客さんとの何げない会話や仕事仲間との会話は実際のネイティブスピードで話されるのでとても緊張し、うまく聞き取れずに落ち込むこともありましたが、回数を重ねていくことに出来るようになっていくことがうれしかったです。

日本では何げなく始めたカフェでのアルバイトでしたが、コーヒーを作る、世界共通のバリスタという技術を偶然にも身につけていたことはラッキーだなと思いました。また、ラテアートでクレーム対応をするというロンドン流の接客方法を学び日本に持ち帰ってきました。英語のためだけではなく、海外で働く経験を積めたことは、本当に自分史に残る出来事です。

TBSとBBCヘインタビュー

TBSロンドン支局では、カメラマンや、いつもTVで見ている記者の方とお話をするのが出来ました。私はアルバイトとして報道番組に携わり、ロンドン支局の方々が撮影した映像を扱っていたので、その裏側を知ることが出来たことは刺激になり、また日本に帰ったらこの仕事を頑張ろうというモチベーションになっています。

一方、世界のBBCは、やはりすべての規模が違っていて、取り扱う映像の量が多かったのが印象的です。その中から日本のメディアとは違う観点が必要だと思うものを抜き出しニュースを作っていました。滞在中に、運良くスコットランドの独立住民投票があり、TBSとBBCの二つのテレビ局を取材したことによって、二国間でのメディアにおける違いを自分の肌で感じられたことが何よりも面白かったです。

これから

計画通りにいかないことや、想

像と違って戸惑うことももちろんありましたが、それをどうしたら良いのかと考えて行動した一カ月間は確実に私の糧になっています。

せっかくホームステイをしているのに、ホストファミリーに自分の英語が通じないことを恐れて自分の部屋に閉じこもっていたり、カフェの日本語が一切通じない環境での仕事のすべてに付いていけず、ひたすら落ち込んで涙した最初の一週間もありました。

しかし、自分自身で試行錯誤してやっと決めた計画であることと、学校からの奨学金をいただいで来ているんだという自信が常に私のモチベーションになっていたと思います。

TBSロンドン支局のカメラマン、記者さん



英語力だけではなく、今回の留学を通して身につけた計画力、行動力、適応能力で、やってみたいと思ったことには迷わずに挑戦していくことが目標です。

御協力いただいたすべての皆様へ感謝し、恩返しが出来るといような人間になりたいと思います。